

## 5 現代のフロンティア、ヒューストン

### 5.1 再度アメリカへ

グランド・ツアーとしての長い過酷なスケジュールのヨーロッパ旅行を終え帰国し、1977年の正月は、6年ぶりに日本で迎えることが出来た。正月の賑わいが過ぎ、静かになった古都鎌倉の神社仏閣の古い建築物を私はのんびりと訪ね回っていた。私は今までの自分の人生、これからの生き方について、いかに建築家として生きていくかを考えていた。

日本の歴史的空間の中にいることによって、もっと自分を見つめられる気がしたからである。境内にはもう参詣人は少なく、静かであった。梅の花の香りが漂っていた。このような空間を歩くと、心が落ちつく。確かに、空間の構成のバランスは、私の意識に安定感を与えてくれ、秩序正しい構成が静けさを感じさせてくれる。しかし、私にとっては刺激が少なく、何か物足りない。私は、自由で、奔放で、アンバランスに構成された空間が欲しくなる。これは単に日本の建築空間構成だけの問題だけではなく、規律正しい日本の社会そのものの構成の問題だともいえるのかもしれない。私は常に何か刺激を求めて生きていこうとしているのかもしれないと思った。

アメリカの建築設計事務所での仕事、イェール大学の大学院での勉強、そして、建築修業としての旅のヨーロッパ・グランド・ツアーを終えて、日本にもどってきた今、私の感覚や考え方は、日本にいた時の私とは少し変わったような気がした。日本と欧米の、その文化や生活の違いを比較しながら、物事の判断が出来る様になったかもしれない。

日本の歴史的建築文化においては、プラザと呼ばれる様な公共の大きな広場の空間が少ない。人が目的地に向かって移動する、流れる、そういう空間が多い。しかし日本の歴史的な街の空間は、ヨーロッパの様にほとんど建物だけで構成されているのではなく、木、石、草花といったランドスケープが主要な外部空間を作っている。今の言葉で言うと環境設計である。私は強弱、大小のあるそんな広場的な淀みのある不規則的な空間と建築が好きなのだ。それは建築だけでなく生きていく生活のリズムも同じ気がする。

私は、再度、渡米しようとしている。6年前に初めて渡米した時に比べれば、気が楽である。アメリカで働いていけるだけの建築に関する実力を身につけることが出来た気がするからである。しかし、以前と同様に働く所、生活する所、住む街さえ決まっていない。不安ではあるが、これからが本当に建築家として腕を磨く時であるから、アメリカにもどらなければ、行かなければならないと思っていた。

6年前も今と同様に、アメリカに行きたい、行

**鎌倉、光則寺に続く道。伝統的な重厚感のある屋根の日本建築と自然らしく出来ている庭園がバランスがとれて美しいのだが、なぜか私には強いられて、そして圧迫感が感じられた。**



**円覚寺の舍利殿に通じる道。規律正しい建築構成と整理された樹木が安心感と静けさを与えてくれる。**



かなければ、という望みが先立っていた。私の渡米の目的は、単に建築修業の旅というだけでなく、人生修業の旅でもあった。自由を求め、パイオニア・スピリットを持って生きることが出来る、そういう新しい社会での生活への憧れも持っていたのだ。一応、現代建築を学ぶという目的、世界一の建築の大学院で学ぶ、世界一の建築設計事務所で働きたいという夢と希望だけを持っていたがそれ以上に何かを求めていたのかも知れない。今となって考えてみれば、今もそうであるかもしれないが、大変無謀であった。アメリカの社会を十分に知らなかったからかもしれないが、なぜ多くのリスクを背負って渡米したのだろうか。

私の若い頃の日本での生活はたいへん厳しいものであった。おそらく私の持って生まれた人間の価値観と私が生きてきた環境の歯車がうまくかみあわなかったのである。そんな生活、環境から抜け出す為に、私の人生は戦いの連続であった。ある時は、日本で自分自身の建築に対する夢を持つことは、絶望的である様に思えた。そんな状況の中で、何か目的を作って私はアメリカへ行くことを決心した。渡米することは、神らしきものによってすでに私に与えられた宿命的な道なのかもしれないと信じ、必死に生きてきた。しかし、人間は、ガムシャラに走り続けるのも良いが、ある時は立ち止まって、人生を振り返って考え、生きていく方向を再確認する必要があるのではないかと思った。過去の自分の人生を分析することによって、生きる方向が明確になってくる気がするし、これからしようとする事に対して勇気づけてくれるような気もするからである。アメリカで建築家として生きていくことを分析する前に、日本で生きてきたことも分析しなければいけないと思った。建築とは私にとって生きる為の表現であり、手段でもあるので、なぜ建築家をめざすようになったのか。私の子供の頃からの日本での生き方を分析することによって、アメリカで建築家として生き続けていることがもっと明確になる気がしたのである。これは私自身への問いかけでもあった。古都鎌倉の神社仏閣の古い建築物を見てまわりながら、私はそう思っていた。

### 5. 1. 2 日本からテキサスへ

ニューヨークの街には、パイオニア・スピリットがまだ残っていないわけではないが、若い建築家には競争が激しく、刺激が多く、ある意味で完成されているニューヨークの街では、修業の場として生きるには良い街かもしれない。しかし、人間がいや私が一生住む



万寿寺の境内への道。これも人間が作った自然、きれいに刈り込まれたランドスケープが建物以上に人に安らぎを与えてくれる。しかし、なぜか堅苦しく感じてならない。

という事を考えると、私は疑問を抱いた。冬のマンハッタンの街で見かけたことだが、老人が公園のベンチに座っていた。老人は少しでも冬の日差しを得ようと、摩天楼がおとす影を避けて、日影が少しずつ移動すると、ベンチの上を横にずれて座りなおした。

私は、太陽の光を燦々と浴びられる所に住みたい、と思っていた。いつか、カリフォルニア辺りに住みたい、と思っていた。しかし、西部に行く前に、南部のテキサスに行ってみようと考えていた。

ベトナム戦争は終わったが、アメリカ全土はオイルショックの後で、まだ不況の中にあった。しかし、オイルの原産地のテキサスは景気が良かった。特にヒューストンのビジネスは、オイル産油国のサウジアラビアと深くつながりがあり、ブームタウンになっていた。

イェール大学の大学院の2年目の時、ディベロッパーのコースをとって、学んだことだが、アメリカで4番目に大きな街のヒューストンは、ゾーニング（建物の用途地域制）がないという。ディベロッパーはどこにでも、いろいろな建物を建てる事が出来る、というのだ。ゾーニングがない街とはどんな街なのか、そして、街はどの様に成長し発展していくのか、大変興味があった。無造作に街が発展し、税金も安く、ディベロッパーやビジネスをする人達にとっては、大変有利な街であった。それが急成長する原因のひとつとなって、ヒューストンは現代アメリカのフロンティアとなっていた。さらに興味があったのは、テキサスはリパブリック・オブ・テキサスというくらいに、アメリカでも独立した州だというくらいにテキサス人は非常にプライドを持っているということであった。ローンスター（一つの星）のテキサス州の旗もそれを物語っている。

**なおみが通っていた鎌倉第一中学校の校庭から光明寺の屋根を越えて由比ガ浜、江ノ島と富士山を望むことができる。歴史が止まっているような静かな鎌倉の冬。**



**用途地域がなく乱開発の続くヒューストンのウエストサイド地域。絶え間なく街のスカイラインが変わっていくブームタウンであった。**

朝から晩まで毎日休むことなく建築を追い続けた旅も終わり、それらの疲れを洗い落とすかの様に久しぶりにゆっくりと鎌倉で過ごした。口には出さなかったが、なおみは再度、渡米することに大変ためらいがあったようであった。それはアメリカでの生活の厳しさや若き建築家の生きる厳しさを知ってしまったことや、又これから行こうとするテキサスはまったく未知の地で、

仕事も住む所さえ決まっていなかったからである。仕事も住む所もない、それにまだ行ったことのないテキサスに行く等と、とても親には言えなかったと言う。どうしてこんなにも穏やかな平和な鎌倉での生活から抜け出さなければならないのかと、いろいろと格闘があったようである。それでも再度、一緒に渡米となった。

1977年3月の初旬に、ニューヘブンをにもどった。ヨーロッパ旅行へ出かける前に、私はニューヘブンの設計事務所で働いていたその事務所の倉庫に、我々の身のまわり品を保管してもらっていた。その身のまわり品や本を、レンタカーしたユーホールの荷物車に積み込んだ。そのユーホールの車を、自分の古い大きなフォード車に付けてドライブするのである。その様子は、まるで現代の幌馬車といったところだった。かつて西部の開拓時代、ゴールドラッシュの時に多くの開拓者達は幌馬車をつらねて、西部へ、西部と向かった。それと同じ様に、1970年代の後半は、オイルラッシュで多くのアメリカ人は仕事を求めて、南部のテキサスへ向かった。このユーホールを付けた車やユーホールのトラックがテキサスに集まったのだ。テキサスのブームタウンの始まりだった。ほとんどのレンタカーのユーホールの車がテキサスに集まったといわれる位のブームタウンになっていた。ニューヘブンを出発したのは、3月の中旬だったが、そこにはまだ雪が残っていた。今度の

**1971年、サンフランシスコからグレーハンドバスに乗って4日間かけて東部のニューヨークへ向かった。**

**1977年、ニューヘブンからユーホールを引いて1週間かけて南部のヒューストンに向かった。**

**1980年、ヒューストンからマスタングの車に乗って5日間かけて西部のロスアンゼルスに向かうことになる。**



**現代の幌馬車、古い車にユーホールの車をつけて南部に向かう途中。  
車が古かったことや現代の幌馬車を引いての旅はスローであった。**



出発も、以前と同様で行く先に知人がいるわけではない。仕事が決まっているわけでもなかった。ただ行かなければ、というパイオニアのチャレンジの気持が私をテキサスに向かわせたのだ。

私にとって、テキサスは未知の土地であったが、何か大きな夢があるところの様な気がしていたのである。北部のニューヘブレンから、南部のテキサスまでは遠い。古い車でユーホールを引いての旅は、1週間もかかった。南北を分けたかつてのデキシーランドのラインを越えて南部の州ノースカロライナに入る辺りから、あっちこちでカントリー・ミュージックがよく聞かれる様になった。ホテルのテレビで、その頃一番人気があったブロンドでグラマーなカントリー・シンガーの、ダーリー・パートンの歌をはじめ聴いた。北部のニューヘブレンではとても聴けないカントリー・ミュージックである。異国に来てしまった感じがした。ヨーロッパで味わった、あの国境を越えた感じだった。テキサスはまだ遠く、そして南部は広い！

ミシシッピ川下流の、デルタ地帯の一部となっているヒューストンは、真っ平な地域である。山や丘はなく、雨が多い。湿度が高く、緑におおわれている地域であった。真っ平なグリーンがはてしなく広がるかなたにヒューストンの超高層ビル群が見えてきた。超高層ビルの建ち並んでいる、ダウンタウンのスカイラインは、何かスケールが違うが、イタリアの山岳都市の風景を思いださせた。あのベルタワーが建ち並んでいる、サン・ジミニアーノの風景である。沢山タワーが、あるいは超高層ビルが建ち並ぶことは、その街のパワーを表現している。建物が高ければ高い程、人間のパワーを意味する様に思えた。フリーウェーのアプローチでダウンタウンが近づいてくると超高層ビルが重なり合い、オズの魔法使いの中に出てくるおとぎの国のスカイラインにも似ている気もした。何か夢のある街に来た気分になってきた。まだ3月下旬であったが、ヒューストンはもう夏の陽気であ

**真っ平らなグリーンの地平線とおとぎの国のようなヒューストンのダウンタウンのスカイラインが現れた。この街もオイルマネーで出来上がった街だ。**



**ヒューストンのダウンタウンの碁盤目の様な街の区画が超高層のタワーを独立して並べているように見えたスカイライン。**

った。街のあちこちに工事用のクレーンが立っていた。

道路の整備は街の開発に追いつかず、アスファルトの道路は穴だらけだった。その穴だらけの道を、工事用のトラックがひっきりなしに走っていた。

